

教育思想史による教職課程履修学生の教育観の形成の在り方

—OPP シートを活用した自己評価と教育観の形成—

谷口 雄一*

The Way of the Formation of the Notions of Education of the Student on a Teacher Training Course
by History of Educational Thought

-The Self-Evaluation and the Formation of the Notions of Education with the OPP Sheet-

Yuichi Taniguchi

本研究は、教職課程及び教員養成課程の開設科目である「教育原理」における教育思想史による履修学生の教育観の形成の在り方について検討することを目的としたものである。

「教育原理」とその構成要素である教育思想史は、教職課程及び教員養成課程の基盤を担う科目であるが、履修する学生にとって教育観を形成する機会となっていない課題が散見する。そこで、一枚ポートフォリオ評価（OPPA : One Page Portfolio Assessment）で用いられる OPP シート（One Page Portfolio シート）を活用し、「教育原理」を履修する学生に学修の自己評価を行わせ、教育観の形成を図った。

本研究の結果、教育思想史が履修する学生の教育観の形成に寄与していることが認められた。そして、そのためには、学修の目的を明確にすることや、学習履歴を残すこと、学習履歴を基に学生が自身の学修を自己評価することが有効であることが示唆された。

*摂南大学

1. はじめに

(1) 近年の教員養成をめぐる動向

中央教育審議会は「これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について(答申)」において、「新たな知識や技術の活用により社会の進歩や変化のスピードが速まる中、教員の資質能力向上は我が国の最重要課題であり、世界の潮流でもある。」と、教員政策の重要性について述べている⁽¹⁾。また、教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会は「国民は、公教育の担い手である教員に対して、その職への適正と高い資質能力を期待している。」と、学校教育を担う教員に対するニーズの高さについて述べている。そして、この期待に応えるために、教員の養成・採用・研修の各段階を通じた普段の改善努力が必要であることを指摘している。中でも、教員資格の付与に当たる教職課程の在り方は、最も重要視されなければならないと、教職課程の重要性について言及している⁽²⁾。また、教職課程、つまり、教員養成段階の課題について、中央教育審議会は、養成段階は「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行う段階であることを認識する必要があると指摘している⁽³⁾。

ここで指摘されている教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修を担うのが、「教育の基礎的理解に関する科目」である。そして、その根幹をなす事項が、教育の基本的概念は何か。また、教育の理念にはどのようなものがあり、教育の歴史や思想において、それらがどのように現れてきたかについて学ぶとともに、これまでの教育及び学校の営みがどのように捉えられ、変遷してきたのかを理解するという全体目標を持つ「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」である。

(2) 教員養成における「教育原理」や教育思想史に係る現状と課題

「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」は、教育の基本的概念を身に付けるとともに、教育を成り立たせる諸要因とそれら相互の関係を理解することが目標となる「教育の基本的概念」と、教育の歴史に関する基礎的知識を身に付け、それらと多様な教育の理念との関りや過去から現代に至るまでの教育及び学校の変遷を理解することが目標となる「教育に関する歴史」、そして、教育に関する様々な思想、それらと多様な教育の理念や実際の教育及び学校との関わりを理解することが目標となる「教育に関する思想」の3つの概念で構成されている⁽⁴⁾。多くの教職課程や教員養成課程において「教育原理」や「教育原論」等の科目名で開講され、1年次または2年次の比較的早期に設定されていることが多い。ここから、教職課程及び教員養成課程の基盤を担う科目と言える。

しかし、「教育原理」ひいては教育思想史について、本来の意義と乖離する状況が数多く報告されているのも事実である。

鈴木貴史は、「近年の教員養成は、教職大学院や教師塾に代表されるように、急速にプロフェッショナルリズムに傾いてきた」と、教員養成における実践重視の傾向の高まりに言及し、その上で、「その結果、教育哲学、教育史などの原理系科目は非実践的で役に立たない学問として批判の標的となっている」と、言及している⁽⁵⁾。

菅原健太は、「教育原理」という科目が抱えている問題点として、「教職科目が陥りやすい「必要な知識を身につける」こと、ひいては「試験に合格させること」への教育目標の矮小化」について警鐘を鳴らしている⁽⁶⁾。

これらの要因として、相馬伸一らが興味深い研究を行っている。相馬らは教員採用試験における教職教養分野の出題傾向を教育思想史分野に関連して分析しているが「教員採用試験の出題のほとんどは人名と書名の関連さえ覚えておけば対処できる」と指摘している。その上で、「教員養成において暗黙のうちに求められているのは、過去の教育思想とその展開について知ることで教師としての教育観を自ら育むための教養を提供するということだろう」と、教育観を形成するという教職課程及び教員養成課程における「教育原理」本来の役割を再検討する必要性を述べている⁽⁷⁾。

本稿では、このような状況に鑑み、教育に関する様々な思想、それらと多様な教育の理念や実際の教育及び学校との関わりを理解することにより、自身の教育観を形成・変容させていくという教育思想史を学ぶことの本質的な意義に立ち返ることを試みる。

考察の手順としては、まず、学習評価に関する先行研究を瞥見し、学生が学修の成果を自己評価し、自身の教育観の変容を実感するための示唆を得る。次に、教育思想史による教職課程履修学生の教育観の形成・変容の在り方について、筆者の実践に基き考察する。

2. 学校教育における児童生徒による自己評価の先行研究

ここでは、学校教育における児童生徒による自己評価に関する研究と実践を概観しつつ、そのよさと課題を見ていこう。そして、その営みから、「教育原理」を受講する学生が学修の成果を自己評価することで、自身の教育観がどのように形成し、変容していったのかを実感するための示唆を得ることを試みたい。

(1) 学び続けることと自己評価

遠藤貴広は、自己評価について「学習には何らかの評価行為がともなうといわれています。自分で学習を続けるからには、それにとともなう評価も自分でできなければなりません。自己評価能力の育成が求められる理由です」と述べている。これは、児童生徒が生涯にわたり学び続けていく上で、自己評価をすることが不可欠であることを指摘している。

また、遠藤は、教育現場で実際に行われてきた自己評価の問題点として、ただ漠然と感想を書くだけの評価になっていること、その結果、児童生徒が次にどう改善していったらいいのか分からないこと、の2点を挙げ、「改善の指針を得るために、自分の学習活動の実態を具体的に把握することが自己評価には必要」と指摘している⁽⁸⁾。

遠藤の主張は、学校教育において児童生徒が行う自己評価に関するものである。しかし、学生が自身の教育観の形成と変容を実感するためには、学修の成果を自己評価することが必要であると示唆するものと言える。

(2) 学習の目標を持つことと自己評価

堀哲夫は、自己評価について「学習者自身が、自己の学習目標に照らして学習状況を把握し、学習の改善に生かすこと」と述べるとともに、児童生徒に「メタ認知の育成、学ぶ意味、必然性、自己効力感を感得させるために必要不可欠」なものであると主張している。そして、学習目標について、「学習において学習者が持つ目標を言う。授業の始めから学習目標を持っていることはほとんどないので、学習目標や自己評価を問題にする場合には、授業において学習目標をもつようにする必要がある」と指摘している⁽⁹⁾。

堀は、授業の始めから学習目標を持っていることはほとんどないと述べているが、これは学校教育における児童生徒の場合であって、教職課程及び教員養成課程を履修する学生には当てはまらないと考えられる。その理由は次の通りである。

教職課程及び教員養成課程を履修する学生は、「教員になるために教員免許を取得する」という目標の下、「子ども達により教育ができる教員になりたい」という思いを有している。この「よい教育とは何だろう」等の教育観を学生自身の目に見える形にしていくことで、学習の目標を明確化していくことが可能であると考えられる。

(3) OPP シートを活用した自己評価

堀は、「学習者の資質・能力の育成」、「資質・能力をどう評価したらよいか」、「学ぶ意味、必然性、自己効力感を感得する評価をどう実現するか」、「学習者の学力向上のために教師の授業改善をどう行うか」、「教育評価によって学習者の資質・能力を育てる視点の欠如」等の学校教育が抱える課題を解決する方法として OPP シート (One Page Portfolio シート) を用いた一枚ポートフォリオ評価 (OPPA : One Page Portfolio Assessment) を提唱している。

堀は、OPP シートについて、①学習者が自分で考えてまとめた内容を記録しているかどうか、②形成的評価が容易かどうか、③見通しと振り返りが行いやすいかどうか、④学習全体を構造化した形で把握可能かどうか、の4点を従来のワークシートやノートとの違いとして挙げている。そして、学習による質的変容を確認するために、学習前・後に全く同じ本質的な問いを設定すること等をその特徴として挙げている。中でも、学習による質的変容を学習者に自覚させるために、学習全体を振り返らせる自己評価を働きかけていることは注目すべき点である。堀はさらに、OPP シートを使い、学習者に自己評価させる実践を積み重ねることで、学習者に学ぶ意味や学ぶ必然性、自己効力感を感得させることが可能になってくると述べている⁽¹⁰⁾。

この見通しと振り返りが行いやすいことや、学習者が学ぶ意味や学ぶ必然性、自己効力感を感得することができるという OPP シートの特徴は、「教育原理」の学修を学生の主体的な学びの機会へと変容し、その学びが学習者つまり学生自身によって評価され、学びの成果が見える形で実感できるものに変えていくための大きな示唆になるだろう。

また、本質的な問いとは「学習前・後に設定される問い。単元を通して教師がもっとも伝えたい、押さえない内容を問いにしたもの」であり、「単元を超えて、教科・科目などの本質は何かという問いにつながっている」ものである⁽¹¹⁾。つまり、「教育原理」の目標である「教育とは何か」を理解するということにつながるものであると考えられる。

3. OPP シートを活用した学びの自己評価と教育観の形成の実践

ここでは、本学の教職課程「教育原理」において筆者が実践した OPP シートを活用した学生による学びの自己評価と教育観の形成について検討する。

本授業は2019年4月から7月にかけて実施したものである。全15回の内容は表1の通りである。教育思想史では第8回から第11回でコメニウス、ルソー、ペスタロッチ、ヘルバルト、フレーベル、デューイを取り上げている。加えて、第11回にはエレン・ケイを、第12回にはキルパトリック、パーカスト、モリソン、ウォッシュバーンを取り上げた。

なお、新課程と旧課程の接続期であったため、今回受講した学生は2名のみであった。

表1 「教育原理」のシラバス

回数	授業テーマ	内容・方法 等
1	ガイダンス: 教育とは何だろう	本科目の位置づけについて考えるとともに、教育の基本概念を考えることの意味を考える。
2	教育の基礎理論①: 教育の必要性	なぜ、人間だけが教育を行うのか考える。
3	教育の基礎理論②: 教育の目的	前回の授業をふまえ、「人間が人間になるために」とはどういうことか、教育の目的について考える。
4	教育の基礎理論③: 子どもの発見	子どもの意味や子どもをめぐる問題について考える。
5	教育の基礎理論④: 教師とは何か	教師という職業や、その教育的役割について考える。
6	教育の基礎理論⑤: 近代の学校の誕生	近代の学校はどのように誕生し、普及してきたのかを概観する。
7	教育の基礎理論⑥: 家庭と教育	家庭において子どもはどう扱われてきたのか、家庭における教育は子どもの成長にどのような影響を与えるのかについて概観する。
8	近代の教育思想①: コメニウスの教育思想	コメニウスの教育思想について概観し、考察を加える。
9	近代の教育思想②: ルソー、ペスタロッチの教育思想	ルソー、ペスタロッチらの教育思想について概観し、考察を加える。
10	近代の教育思想③: ヘルバルト、フレーベルの教育思想	ヘルバルト、フレーベルらの教育思想について概観し、考察を加える。
11	現代の教育理論①: デューイの教育思想	デューイの教育思想について概観し、考察を加える。
12	現代の教育理論②: 20世紀の教育理論	20世紀の教育についての諸理論について概観し、考察を加える。
13	現在の教育課題①: 学力問題	現在の教育課題の一つである学力をめぐる問題について概観し、考察を加える。
14	現在の教育課題②: 生涯学習の思想	現在の教育課題の一つである生涯学習について概観し、考察を加える。
15	まとめ: 今後の教育について考える	教育についてまとめるとともに、今後の教育について考える。

(1) 使用した OPP シート

今回、本授業において使用した OPP シートは図1に示す通りである。堀のものを参考に「学習前・学習後の本質的な問い」と「学習履歴」の3つで構成した。

学籍番号 () 名前 () 講義名: 教育原理

【学習前】「教育」という言葉を使って、文を3つ作ってみましょう。

本質的な問い

○学習前と学習後を比べて、感じたことや考えたことを書いてみましょう。

自己評価

【学習後】「教育」という言葉を使って、文を3つ作ってみましょう。

本質的な問い

テーマ: 4/8 感想・質問など

テーマ: 4/15 感想・質問など

テーマ: 4/22 感想・質問など

テーマ: 5/6 感想・質問など

テーマ: 5/13 感想・質問など

テーマ: 5/20 感想・質問など

テーマ: 5/27 感想・質問など

テーマ: 6/3 感想・質問など

テーマ: 6/10 感想・質問など

テーマ: 6/17 感想・質問など

テーマ: 6/24 感想・質問など

テーマ: 7/1 感想・質問など

テーマ: 7/8 感想・質問など

テーマ: 7/15 感想・質問など

テーマ: 7/22 感想・質問など

学習履歴

図1 「教育原理」において使用した OPP シート

全15回の学修を通して学生が考えることになる「本質的な問い」については、教育の理念にはどのようなものがあり、教育の歴史や思想において、それらがどのように現れてきたかについて学ぶとともに、これまでの教育及び学校の営みがどのように捉えられ、変遷してきたのかを理解するという「教育原理」の全体目標を満たすものである必要がある。そこで、「教育とは何か」という問いを用意しようとも考えたが、これから教育原理を学ぶ、教育に関する認知に乏しい学生にとっては難易度が高いことも想像された。加えて、学生が自身の教育観を形成することができるものである必要がある。

そこで、今回は、「教育」という言葉を使った文を3つ作る」というものにした。この意図は3つある。1つ目は、問いに答える、つまり、答えを探すのではなく、文を作ることを通して教育について学生が自由に考えることができるようにしたいと考えたためである。2点目は、作文する過程で学生がこれまで自身が受けてきた教育について振り返ることができるのではないかと考えたためである。そして、3点目は、文を1つではなく3つとすることで、「教育とは何か」と問われるよりも多面的・多角的な思考を学生に促すことができると考えたためである。

(2) 教育思想史による学生の学び

ここでは、教育思想史を取り上げた第8回から第12回における受講する学生の学びの様相を見ていこう。学生A（以下、A）と学生B（以下、B）のOPPシートの学習履歴への記述を表2に示しておく。

① コメニウスの教育思想による学び

教育思想史の初回である第8回目は、Aが欠席であった。このため、Bと筆者との対話で授業を展開した。学習履歴には「感覚、理性、意思の3つの調和が必要なのは当たり前と思っていた」と自らの教育観についての記述が認められる。その上で、「どれが欠けても成り立たないし、犯罪につながると分かった」と学修の成果を記述している。

② ルソー・ペスタロッチの教育思想による学び

Aは、ペスタロッチが重視する感覚教育が人間の成長への影響が大きいことに言及した上で、「失敗しないと学べないことを学ばせるのが必要」と教育観に関わる記述をしている。

Bは、ルソーの人間としての子どもの発見やペスタロッチの一般的人間教育に言及した上で、「どちらも現代ではあたり前のこと」と記述している。

③ ヘルバルト・フレーベルの教育思想による学び

Aの学習履歴には、「人間はやはり想像力こそが大事で、全てを支えているもの」と自身の教育観を表明する記述が認められる。そして、フレーベルが価値ある学習活動と位置付けた遊びについて「大事」と述べている。また、子どもの頃のごっこ遊びについての記述も認められる。

Bは、「今回は現在の子どものが行う教育と似ている」と記述している。これまでも同様の記述が数回見られているが、学修した内容と自らが受けてきた日本の学校教育の経験とを往還させながら理解を深めようとしているのが認められる。Bの特徴と言えよう。

表2 教育思想史分野における学生の学習の履歴

	学習履歴	
	学生A	学生B
第8回： コメニウスの 教育思想	欠席	感覚、理性、意志の3つの調和が必要なのあたり前だと思っていたので、理由を考えるのは大変だった。どれかが欠けても成り立たないし、犯罪につながると分かった。 道徳が教科化してどこまで効果が出るか楽しみな一方で、そこで出た改善点に対処するもの大変だと思いました。
第9回： ルソー、 ペスタロッチ の教育思想	感覚教育が大きくなるとともに影響していると思います。 失敗は成功のもとと言いますが、私はそれは確かにあると思います。失敗しないと学べないことを学ばせるのが必要だと思います。	ルソーの考える子どもを小さな大人として扱わず、子どもとして見ることと、ペスタロッチの全ての人が教育を受けるという考えが、どちらも現代ではあたり前のことだったので、今は良い環境で教育を受けられていることが分かりました。 スウォッドリングが赤子をものとして扱っているように感じ、嫌だった。当時の育児放棄だと思います。
第10回： ヘルバルト、 フレーベルの 教育思想	想像力を養うための「遊び」。人間はやはり想像力こそが大事で、全てを支えているものだと思うので、「遊び」は大事だと思いました。 昔、2段ベッドで釣りごっこをしたことを思い出しました。	今回は現在の子どもが行う教育と似ているなと思いました。 四段階教授法での言葉が多く、意味も似ていたので覚えにくいなと思いました。 子どもは遊んで学ぶけど、それが危険なく許される範囲の教育をするのは大変だろうなと思いました。
第11回： デューイの 教育思想	私はゲームから学んだ人でした。ゲームに勝ちたいから、勝ち方や強いキャラクターを調べたりしました。そのやり方を学習でも生かしていました。点数を取りたいから調べ学習をする。書物の必要感が育まれました。	小学生の時の担任の先生は授業中に話が全く関係ないものに変ったり、居眠りした生徒がいたらドッキリをしたりと、遊ぶことが多い先生でした。ふざけることは多かったけど、実験も多く、実行する楽しい思い出があり、今回の授業で思い出しました。
第12回： 20世紀の 教育理論	欠席	私の学校は特別に何らかの活動をするのがなかったなので、今回の様々な教育はおもしろかったです。 教育ではなかったけど、小学生の時にガールスカウトのような体験活動をしたことがあり、とても楽しかったので、教育としてできたらもっと良いだろうなと思いました。

④デューイの教育思想による学び

Aは、「私はゲームから学んだ人でした」との言葉に代表されるように、今回、過去の自分についての記述にそのほとんどを割いている。その上で、「書物の必要感が育まれました」と、子どもに経験の中で問題や動機や興味を感じ取らせるように促すことが大切であるというデューイの主張に関わる自身の経験を記述していることが認められる。

Bの学習履歴には、デューイの教育思想に直接言及する記述は認められない。しかし、小学校時代の恩師やその時の思い出について「今回の授業で思い出しました」と記述されている。BもAと同様、学修においてデューイの様々な教育に関する考えに触れながら、それらに関わる自らの被教育体験に思いを巡らせていたことが感じ取られる。

⑤20世紀の教育理論による学び

教育思想史の最終回である第12回は、前回取り上げたデューイに様々な影響を受けたキルパトリック、パーカスト、モリソン、ウォッシュバーンの4名を取り上げた。なお、Aが欠席だったため、Bと筆者との授業となった。

Bは、「私の学校は特別に何らかの活動をすることがなかったので、今回の様々な教育はおもしろかったです」と、4名の教育家の取組について言及している。その上で、自身の小学校時代の体験活動の経験を振り返り、「教育としてできたらもっと良いだろうなと思いました」と、体験活動による子ども主体の学びを学校教育に取り入れることについての言及が認められる。

以上、OPPシートの学習履歴への記述を手掛かりに教育思想史を取り上げた第8回から第12回における受講する学生の学びの様相を瞥見してきた。AとB、双方の学習履歴からもそれぞれが授業で取り上げた教育家やその思想、実践を単なる知識として得ようとするのではなく、自身の被教育体験と向き合う機会としている様子、これから教員になろうとする自らの教育観を形成する足掛かりにしている姿が認められる。

(3) 本質的な問いへの回答と学修の自己評価

本授業を履修する学生2名が作った「教育」という言葉を使った文は表3に示す通りである。学習前の文は、第1回の授業(ガイダンス:教育とは何だろう)の際に作っている。学習後のものは、第15回の授業(まとめ:今後の教育について考える)で作ったものである。どちらの回答についても、OPPシートに記入した後、全体で交流する機会を設けた。

表3 「教育原理」履修学生の本質的な問いへの回答と自己評価

	本質的な問いへの回答		自己評価
	学習前	学習後	
学生A	「教育」は人類が産んだ財宝である。 教育と「教育」は別物であり、真の「教育」は人同士で可能。(現在) 「教育」とは人が絶えず行ってきたものであり、これからも行われるものである。	「教育」とは人を育て、ヒトを人たらしめるものである。 「教育」を行う者は、絶えず「教育」を考えなければならない。 「教育」は社会全体で行うものであり、学校はその代表である。	学習前と学習後で主な考えの軸は変わりませんでした。が、しっかりと「教育」について学ぶことで、考えがより明確かつ具体的になり、現実味を帯びたのかなと思います。
学生B	教育実習生になる。 教育方針を決める。 教育内容について考える。 最近の教育に関する情報を得る。 子どもの感じる教育と大人の教育の違い。	現在の教育に関して、子どもを大人として扱っていた時に比べて生徒主体であった。 哲学的な考え方から教育ができた。 道徳を取り入れることで理・徳・知ができるかどうか、新しいものが必要。教科に組み込む必要はなくなったのか。	学習と勉強に違いがあるように、教育にも似たニュアンスのものが多くある。他人の意見からあたりまえのことに疑問を持てるようになった。 教育に関連する語や勉強という意味のものが多い。内容が増えた。歴史が多めだった。

Aは、「教育と「教育」は別物」や「真の「教育」は人同士で可能」といった記述からも読み取ることができるよう、学習前の時点で、独自の教育観を形成していた。

学習後の回答を見てみると、まず、「「教育」とは人を育て、ヒトを人たらしめるものである」との文を作成している。これは、第2回 教育の基礎理論①において取り上げたカントの「人間は教育されねばならない唯一の被造物である⁽¹²⁾」との考えが影響していると考えられる。また、「「教育」は社会全体で行うものであり、学校はその代表である」という記述は、Aが学習前に「「教育」とは人が絶えず行ってきたものであり、これからも行われるものである」と記述していた中の「これからも行われる」の部分が、「教育原理」の学修を通して、生涯学習と学校教育との関係というより具体的なものになったと推測される。

Aの本質的な問いへの回答で、学習前・学習後での明確な違いは、教育観に関わる認知の記述のみであったのが、「考えなければならない」と行動につながる記述がみられるようになったことである。この文に書かれている「「教育」を行う者」とは、もちろん教育に関わる人間一般を示していると言えるが、Aは教員になろうとしている学生である。つまり、A自身を指している訳でもある。私は「絶えず「教育」を考えなければならない」というAの教育観の形成がここに認められる。このことは、学修の自己評価の欄の「考えがより明確かつ具体的になり、現実味を帯びたのかなと思います」という記述からも推測できる。

Bは学習前の本質的な問いへの回答を交流した際に、「教育って何だろうと考えてもあまりよく分からなかったので、思いつくままに書いてみました」と語っていた。その言葉を示すように、Aと比較して、教育観と呼べるような記述は皆無であった。しかし、学習後の回答には、Bの「教育原理」の学修の成果や変容が記述されている。

1つ目の文にある「生徒主体」は、これに関連する記述がBの学習履歴にはたびたび登場している。学習前の回答には認められなかったBの教育観である。次に、2つ目の文にある「哲学的な考え方から教育ができた」という考えも、学習前の回答には見られないものであり、学修を通してBの中に形成された教育観と言える。そして、3つ目の文では、道徳教育についての言及が記述されている。しかし、「教科にくみこむ必要なくなったのか」と疑問を呈する形の文となっていることから、Bの教育観というよりは学修を通してBに生じた問いと考えるのが適当であろう。

Bの学修の自己評価の欄には3つの内容が記述されているが、内2つは「教育原理」の学修内容についてのものだと推測できる。だが、「他人の意見からあたりまえのことに疑問を持てるようになった」との記述は、Bが学修を通しての自身の成長を実感していることを示すものである。

5. おわりに

本稿は、学生が自身の教育観を形成・変容させていくという教育思想史を学ぶことの本質的な意義に立ち返るために、教育思想史による教職課程を履修する学生の教育観の形成の在り方について検討してきたものである。以下の3点について指摘できると考えている。

1点目は、学習の目的を明確にすることである。OPPシートの本質的な問いに回答し、交流することで、「教育とは何か」という問いが生じた。そして、この問いがAとBにとって「教育原理」を学ぶ目的となり、その後の教育思想史分野の授業においても主体的・対話的な学びが展開されることとなったのである。

2点目は、学習履歴を残すことである。Bが「あたりまえのことに疑問を持てるようになった」と自己評価しているが、これは、自己評価する際にBが学習履歴を見返し、当たり前だと思っていたことについて問われたことに関する数々の記述に気付いたからである。

3点目は、学生が自身の学修を自己評価することである。Aは、学修の自己評価の欄に「考えがより明確かつ具体的になり、現実味を帯びたのかなと思います」と記述している。このように学修による自身の成長を実感することで、学生は教員という目標に向けて今後も教育について学び続けていこうとする。そのために、学修の成果を学生自身の手で記述し、見える形にすることが不可欠である。

本研究は、教職科目「教育原理」においてOPPシートを活用することが、上記の3点を実現し、履修する学生が自身の教育観の形成していくための有効な手立てとなることを示唆するに足るものと言える。今後も継続的に実践し、その効果の検証を重ねていくことで、教育思想史による学生の教育観の形成の在り方について明らかにしていきたい。

【註】

- (1) 中央教育審議会『これからの学校教育を担う資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて～（答申）』2015年、2頁。
(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf 2019.12.11)
- (2) 教育課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会『教職課程コアカリキュラム』2017年、1頁。
(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf 2019.12.11)
- (3) 前掲(1)、16頁。
- (4) 前掲(2)、11頁。
- (5) 鈴木貴史「教員養成課程における教育哲学と教師の人間形成—小原國芳『教育の根本問題としての哲学』を中心として—」『東北福祉大学・大学院紀要』第1巻第2号、2010年、149頁。
- (6) 菅原健太「教職課程「教育原理」におけるアクティブラーニングの意義と課題」『豊岡短期大学論集』第13号、2016年、109頁。
- (7) 相馬伸一・室井麗子・椋木香子・小山裕樹・生澤繁樹「教員採用試験における教職教養分野の特質と課題—教育思想史分野を中心に—」『広島修大論集』第58巻第2号、2018年、154-155頁。
- (8) 田中耕治編『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房、2005年、60頁。
- (9) 堀哲夫『新訂一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』東洋館出版、2019年、267-268頁。
- (10) 前掲(9)、47-55頁。
- (11) 前掲(9)、274頁。
- (12) Kant, I (尾渡達雄訳)『カント全集第16巻—教育学 小論集 遺稿集—』理想社、1966年、13頁。